二科展院展急行瞥見記

寺田寅彦

九月三日は朝方荒い雨が降った、やがて止んだが重苦しい蒸暑さがじりじりと襲って来た。仕事をしていると『中央美術』から電話が掛かって今日が二科会展覧会の招待日であることを想い出させられた。数年前まではこの日を指折り数えて楽しみにしていたのが、近年どうしたわけか、急に興味が減退した。今年はとうとう肝心の日をすっかり忘れてしまっていたのである。甚だ申訳ない次第である。これは一つには自分がだんだん年を取ってすべてのものに対する感興の強度を減らしたためもあるかもしれないが、一つにはまた実際に近頃の二科会の絵の傾向が自分の好みに背馳（はいち）し

て来たように思われたためもある。昨年の会など、見ているうちに何だか少しむっとするような気がして来てとうとう碌（ろく）に見ないで帰って来て、それきりもう二度とは入場しなかったくらいである。勿論これは二科会の責任ではなくてただ自分という一人の人間の勝手な気持によるものである。しかし今年は「回顧陳列」というのがあるというので、これだけはぜひ見たいと思っていたものを、それすら当日の朝は綺麗（きれい）に忘れてしまっていたのである。これは耄碌（もうろく）と云われても仕方がない。

昼過ぎに上野へ出掛けたが、美術館前の通りは自動

車で言葉通りに閉塞されていた。これも近年の現象である。美術が盛んになったのではなくて自動車が安くなったのであろう。

場内は蒸暑さに茹（う）だるようであった。この美術館の設計はたしかに日本の気候が西洋の気候とちがうという事実を知らないか、無視した人の設計である、といつも思うことである。

蒸暑さが丁度大正十二年九月一日の二科招待日を想い出させた。あの日も、午前に狂雨が襲来して、それが晴れ上がってからあの大地震が来た。今日の天候によく似ている。しかし昨朝八丈島沖に相当な深層地震

があったのでそれで帳消しになったのかもしれない。あの日は津田君の「出雲崎（いずもざき）の女」が問題になっていて、喫茶室で同君からそのゆきさつの物語を聞いているうちに震（ふ）り出したのであった。その津田君は今年はもう二科には居なくなったのである。

回顧室に這入（はい）るとＩ君に会った。「どうも蒸暑い」というとＩ君は「絵もアツイ絵ばかりだから」という。

この室のものはさすがになつかしいものばかりである。斎藤豊作（ほうさく）氏の「落葉する野辺」など昔見たときは随分けばけばしい生ま生ましいもののような気がしたのに、今日見ると、時の燻（いぶ）しがかかったのか、それと

も近頃の絵の強烈な生ま生ましさに馴れたせいか、むしろ非常に落着いたいい気持のするのは妙なものである。坂本繁二郎（はんじろう）氏のセガンチニを草体で行ったような牛の絵でも今見てもちっとも見劣りがしない。安井氏のを見ると同氏帰朝後三越かどこかであった個人展の記憶が甦（よみがえ）って来て実に愉快である。山下氏のでも梅原氏のでも、近頃のものよりどうしても両氏の昔のものの方が絵の中に温かい生き血がめぐっているような気がするのである。故関根正二（しょうじ）氏の「信仰の悲み」でも、今の変り種の絵とはどうもちがった腹の底から来る熱が籠っていると思われる。すべての宗教には陰惨

なエロチシズムの要素をもっているということをこの絵が暗示しているように思われる。中川一政(かずまさ)氏の素朴な静物も今日よく見直してみてもやはり何とも説明し難い実に愉快なすがすがしさをもっている。これらの絵はみんな附焼刃でない本当に自分の中にあるものを真正面に打出したものとしか思われない。これに反して今時の大多数の絵は、最初には自分の本当の感じから出発するとしても、甚だしいソフィスチケーションの迂路(うろ)を経由して偶然の導くままに思わぬ効果に巡り会うことを目的にして盲捜りに不毛の曠野(こうや)を彷徨(ほうこう)しているような気がする。青く感じたものは赤く塗り、丸

く見えたらいびつに描くというような概念的機械的方法によって製作しているのではないかという疑いが起るのは、やはり許してもらう外ない。

近頃の絵は概して「きたない」のが多い。九月二日に日比谷交叉点で、ひどい皮膚病に冒された犬を見た。犬は自分の汚さは自覚していないが、しかし痒いことは感ずるから後脚でしきりにぼりぼり首の周りを掻いていた。近頃のきたない絵もやはり自分のきたなさは感じないがその痒さを感じてぼりぼりブラシで引掻いたような痕が見える。

きたなく汚れて、それでいて実に美しいものも世の

中にはある。ヴェニスの街のような者がそれである。綺麗できたないものは近頃の絵にはいくらでもあるのである。大家の絵にもそれがある。

いわゆるプロ絵なるものはどうしてああ鈍い色彩の間の抜けた構図ばかりしなければならないか了解が出来ない。文部省も内務省もこの点は意を安んじてもいいであろうと思われた。こういう絵を見ては誰でも資本主義を謳歌したくなる。

安井氏の「風吹く湖畔」を見ると日本の夏に特有な妙に仇白（あだじろ）く空虚なしかし強烈な白光を想い出させられるが、しかしそういう点ではむしろ先年の「海岸風景」

の方から一層強い印象を受けたような気がした。ともかくもこの日本の白い夏の光は絶望の悲哀といったようなものを含んでいる。それを発見したのは安井氏であるような気がする。

石井氏の「二科同人群像」には単なる似顔の集成でなく、各メンバーの排置のみならずそのポーズや服装によって各自の個性を表現しようという苦心の痕が覗われる。とにかく、このような同人群像を試みるとしてはおそらく最も適任な石井氏が更に研究を重ねてこの絵の完成に勉（つと）められることを希望する。ただ、出来るなら、もう少し動的な排列にしたらどうかと思った

ことであった。

二科の彫刻塑像には帝展などのとちがって何となく親しめるものが多い。自分は、彫刻を見た時に何となく両手の掌で撫(な)でてみたくなるようなものならきっといいものだ、という妙な迷信をもっている。二科会の今年の出品中の若干の人間の首などにはやはりそんなのがある。しかしメストロウィークを崩したような大物になると、どうにも自分などのようなものの好意の圏外に飛出してしまう。

美術院はほとんど素通りした。どちらを見ても近寄ってよく見ようというような誘惑を感じるものはほ

とんどなかった。絵でも人間でも一と目で先ず引き付けられないようなものにはやはり何か足りないものがあるかと思う。美術批評家でも何でもない自分等は、そういう第一印象を無視して無理に職務的に理論的に一つ一つの絵の鑑賞点を虫眼鏡で掘り出す気にはどうにもなれないのである。

横山大観氏の絵だけには、いつでも何かしら人を引きつける多少の内容といったようなものがある。決して空虚な絵を描かない人である。今年の幽霊のような女の絵でも、決して好きにはなれないが、しかし一度見たら妙に眼に残って忘れられない不思議なものを

もっている。これに反してその隣にあった桜の写生屛風などは第一印象も第二第三の印象も自分には何も残らない。第一、部分と全体とが仲違いをして音信不通の体である。短夜の明け方の夢よりもつかまえどころのない絵であると思った。そういう絵が院展に限らず日本画展覧会には通有である。一体日本画というものが本質的にそういうものなのか。つまり日本画というものはこういう展覧会などに陳列すべきものでないのかとも考えてみる。しかしここにもし光琳（こうりん）でも山楽（さんらく）でも一枚持ってくればやっぱり光って見えはしないかとも思う。来年から、一室に一つくらいずつそういう参考

品を陳列して刺戟剤にしてはどうかと、そんな事も考えてみた。

個人展覧会は別として、こういう綜合展覧会は結局個性の展覧会である、それだのに個性のない絵を何百も並べては少なくも展覧会の観客の大部分を形成する素人の見物には退屈の外何物をも与えない。多少の個性は勿論一人一人に多少ずつはあっても、それが浜の真砂の一つ一つの個性のような個性では専門家以外には興味は稀薄である。一粒選りの宝石の個性を並べてもらいたいというのが吾々のようなものの勝手な希望である。それには毎年一回の展覧会は少し多過ぎる。

五年待ってもいいから、もう少し興奮するような展覧会がほしいと思う。出来ない相談とは知りつつも、毎年の展覧会を見る度にそう思わないことはないのである。

これらの不平はみんな、つまり自分がだんだん老耄（ろうもう）して来て頭が古くなり、感激性が麻痺したせいかもしれない。しかしそうばかりでもないかもしれないと思うことは、一体二科会とか美術院とかいう展覧会が十年も二十年も継続しているという不思議な事実自身で証明されているような気もする。これは少し変った言い分のようであるが、しかし一般に云って、同じ団体

がそう永く無事に続くということ自身が沈滞と硬化とを意味する場合が多い。これは政党でも学術団体でも、芸術団体でも同様である。どこでもやはり時々「野獣の群」が出なければ新しい生命の叫び声は聞かれないのではないか。尤もここで「野獣の群」というのは破壊的な乱暴者でもなければ、無意味に変態な病的のものを求める猟奇者でもないことは勿論である。現在の「きたない絵」を描く人達は古い伝統を離れようとして新しい伝統の穴に陥って藻掻(もが)いているようである。むしろ、あらゆる伝統を深く掘り下げ、嚙みこなして、十二分に腹をこしらえてから後に、自分の腹一杯の声

を出して、自分の中にある本当のものを正直に表現するのが本当の「野獣」である。野獣の皮を被った羊や驢馬（ろば）は頼みにならないのである。

こう云ったからといって私は二科会や美術院の解散をすすめるというような大それた考えを持ち出す訳でも何でもない。ただ、学芸にたずさわる団体は時々何かしらかなり根本的な革新を企てて風通しをよくし、黴（かび）の生えないようにする必要があるという至極平凡なことを、やや強く表現しようとしただけのことである。実際、少々拙ない改新でも完全なる習俗に優ることがしばしばあるという事実を人は往々にして忘れがちな

ものである。

（昭和八年十月『中央美術』）

底本：「寺田寅彦全集　第八巻」岩波書店
　　　1997（平成9）年7月7日発行
底本の親本：「寺田寅彦全集　文学篇」岩波書店
　　　1985（昭和60）年
初出：「中央美術」
　　　1933（昭和8）年10月1日
※初出時の署名は「吉村冬彦」です。
入力：Nana ohbe
校正：松永正敏
2006年7月13日作成
青空文庫作成ファイル：

このファイルは、インターネットの図書館、青空文庫（http://www.aozora.gr.jp/）で作られました。入力、校正、制作にあたったのは、ボランティアの皆さんです。